

ディケンズと民間伝承

——『ディック・ウィティントンと彼の猫』の役割と意義——

榎 本 洋

1. 序

ディケンズは幼い頃から民間伝承など、御伽噺に親しんだ経緯があるせいか、テキストにもそれへの言及は事欠かない。例えばハリー・ストーン (Harry Stone) の *Dickens and the Invisible World* (1979) によれば、『ドンビー親子』(*Dombey and Son*) に登場するバグストック少佐 (Major Bagstock)、ピプチン夫人 (Mrs. Pipchin)、等は “a giant” (301)、“perfidious goblin” (305)、“ogress and child-queller” (106) とそれぞれ形容されており、これはカーカー (James Carker)、ブラウン夫人 (Mrs. Brown) も同様に魔女などのグロテスクなイメージで語られている。もっとも詳細を極めるのがフローレンス (Florence Dombey) をシンデレラのテーマに見立てた箇所である (pp. 169-92)。詳細はストーンに譲るとして、ここではストーンが御伽噺への言及をちりばめたこうした創作手法を “the new fairy-method” (Stone, 146) と名付けたことを確認すればよい。

しかし、ディケンズの御伽噺への関心は、表面的な言及、引用にとどまらない。『つらいご時世』(*Hard Times*) を見るとディケンズの嗜好が、社会批判となって声高に主張されていることを目の当たりにする。このテキストは、グラッドグラインド (Gradgrind) により設立、支援された学校の授業風景から物語が始まる。子供たちに無味乾燥な知識のみを詰め込もうとする、教員マックチョーカムチャイルド (M'Choakumchild) は “kill outright the robber Fancy” (5) という教育上の名目のもとに、子供の奔放な想像力を抹殺の対象にする。それらは功利主義的な、無味乾燥な象徴として扱われる。グラッドグラインドの世界に対比されるのがシシー・ジュープ (Sissy Jupe) 等のサーカスの世界で、そこには数人の子供たちが、要請に応じて “Jack the Giant Killer”、*The Children in the Wood*” といった御伽噺の演目をこなすことがあるという。彼女はまた父親から “about the

Fairies, . . . and the Dwarf, and the Hunchback, and the Genesis” (63) 等を語って聞かされた経験を涙ながら語る。シシーに軽蔑を隠さないグラッドグラインドは、駆け落ちをした娘のルイザ (Louisa) がシシーに救われると、娘の教育を振り返り、反省に思いをはせる。テキストの最終行の自由間接話法のシシーへの語り掛けは作者の主張であり、グラッドグラインドの心中をも吐露したものだろう: “But, happy Sissy’s happy children loving her; all children loving her; she grown learned in childish lore; thinking no innocent and pretty fancy ever to be despised; . . .” (397-8)。『つらいご時世』が、御伽噺をこうして自由な精神と想像力の源泉として重用しているなら、他のテキストも同じである。週刊誌『家庭の言葉』 (*Household Words*) の “Frauds on the Fairies” (『家庭の言葉』 7, 27, 1853) では、クルイックシャンク (George Cruickshank) が、*Hop-O’-My-Thumb* という創作童話で論争的に禁酒を訴えたことに対して、ディケンズはシンデレラの物語を再現して、御伽噺の文学形式を道徳的な主張に用いる愚を批判し、逆に御伽噺の文学的な至高性を述べている。“A Christmas Tree” (『家庭の言葉』 12, 21, 1850) でも赤ずきんのことを “my first love” と回想しており、『一年中』 (*All the Year Round*, 9.8.1860) に掲載された “Nurse’s Stories” ではジル・ブラス (Gil Blas)、ドン・キホーテ (Don Quixote) の物語をディケンズは高く評価している (Kotzin, 33-34)。

こうしたディケンズの御伽噺への偏愛は、子供時代の理想化、美化、自由な想像力への関心など、ロマン主義的な文脈で語られることが多い。実際、“Where We Stop Growing” (『家庭の言葉』 2, 1.1853) という小品では、ディケンズは “Few people who have been much in the society of children, are likely to be ignorant of the sorrowful feeling sometimes awakened in the mind by the idea of a favorite child’s ‘growing up.’” (107) とユートピア的に理想化された幼年時代を描いている。それでは、ディケンズのこうした偏愛を個人の嗜好という観点を離れ、社会的な文脈においてみると、どうなるだろうか。マイケル・カチン (Michael Kotzin) は、*Dickens and the Fairy-Tale* (1972) という先駆的な研究の中で、ロマン主義的な作家たちが御伽噺を弁護せざる得ない社会的な状況として、猖獗を極めた福音主義と功利主義の台頭を挙げている。

The cause for which the Romantics spoke came to have greater urgency as the

conditions which provoked them to defend the fairy tales intensified during the Victorian period. Earnest, artless, middle-class Evangelicalism increased its influence; the educational theories of the Enlightenment were succeeded by those of its even less imaginative descendant. Utilitarianism; and the age of the city, industrialism, and science came fully into being. (Kotzin, 26)

ロマン主義から始まった御伽噺の伝統はヴィクトリア朝ではカーライル、キングズレーや彼らほど著名ではないにせよ『家庭の言葉』に寄稿している多くの著作家たち（ヘンリー・モーリー（Henry Morley）はその代表格である）により支持され、発展させられてきた。この中にディケンズも加わる。更に指摘されている通り、ディケンズが成熟期を迎えても、御伽噺への関心を失わなかったことは確実であり、その体験がディケンズに多くの素材を提供したという：“And the fairy tales then provided him with a vocabulary of references, images, and motifs with which he could express his vision of the world to others” (Kotzin, 44)。つまり、ディケンズも他の同時代作家と同じく程度の差こそあれ、福音主義の頑なな精神的硬直性と固陋な因習、非人間的な産業主義を招いた功利主義に対する反発として、想像力の重視と因習からの開放を主張する、文学的な手立てとして御伽噺を重視したと言う。

こうした見解はおおむね妥当だが、幾つかの点で批判の余地が残る。例えばストーンやカチンなどが『ドンビー親子』を分析する際に用いたシンデレラのモチーフにせよ、グリム童話が英訳されて以来（1823）イギリスの読書界に定着したものと思われる。従って、こうした研究の多くが依拠するグリム兄弟（Brüder Grimm）、ペロー（Perrault）などドイツ、フランスなどの外国産の童話にディケンズが通暁していたとしても、その「土着性」の希薄さは当時の社会を批評する際に果たしてどの程度、有効であっただろうか。また、多くの批評家がディケンズと御伽噺の関りを指摘はしているものの、その多くはモチーフの言及とか、イメージとか言った断片的、部分的なものに過ぎず、ディケンズの発想、テキストの構図とはあまり関係のない、周縁的な指摘に終始しているように思われる。更に先に引用したカチンの解釈、つまり因習的、固陋な硬直性に対する想像力の開放とユートピア的な幼年時代の理想化、純粹無垢な精神をディケンズが保持したという指摘も、その意味ではモラリスティックなメッセージを主張

した倫理的な解釈にすぎない。

以上の批判を踏まえて、本論文では数多ある民間伝承の中から『ディック・ウィティントンと彼の猫』(“Dick Whittington and his Cat”、以降は『ウィティントンと猫』と記す)を取り上げ、この伝承とディケンズのテキストの関係性を探っていくのを目的とする。

2. 『ディック・ウィティントンと彼の猫』：その意義

『ウィティントンと猫』が特に重要だと思われるのは、16世紀くらいからチャップ・ブックにも取り上げられ(図①)、民衆に親しまれているという土着性があること、それ故にディケンズのテキストでも頻繁に取り上げられているからである。そして伝承のテーマが、一財産を築いて相続し、世俗的な名声を得るといふ、成功物語となることで庶民の夢を具体化しているからである。つまり、『ウィティントンと猫』の伝承は、財を蓄え、世俗的成功を得るといふ金銭の扱い方をテーマにしていることにおいて、イギリスの初期資本主義的な社会のありようを示している。このことが、伝承のイギリス性というか土着性を意味する。

伝承の具体的な内容に関しては、後に分析するとして、この財を築き、継承して世俗的成功を得るといふ経済性は、ディケンズ文学を考えると重要な意味を持つ。サドリン(Sadrin)は、継承(inheritance)のテーマがディケンズと先行するイギリス作家との関りなど、文学的な伝統を考えるとときに重要な概念であると述べ、ディケンズ文学では金銭が大きな役割を果たすと指摘する：“The circulation of money — sales, thefts, debts, bankruptcies, godsend, legacies — is essential to Dickens. What matters is not so much what his characters possess as what they lose or acquire and, still more urgently, the way they lose and acquire it” (Sadrin, 3)。まさしく、金の流通、“sales, thefts, debts...”等がテキストの本質である。ディケンズの主人公は、存在するためには財産を所有することが不可欠であり、その人となりも何を失ったかではなく、どのような形で財を蓄え、失ったのかが問われるという。つまり、『ウィティントンと猫』の伝承同様に、財を蓄え、世俗的成功を得るといふ金銭の扱い方をテーマにしていることにおいて、資本主義的な社会のありようを示していることでは、ディケンズも同じなのだ。ディケンズのテキストの雛型であり、親和性は高い。

実際のところディケンズの主人公の多くは、経済的な成功に取りつかれて、逸っているところがある。『ニコラス・ニッケルビー』(*Nicholas Nickleby*、以降『ニコラス』と記す)では、ヨークシャーの学校教師として現地に赴いた後、ケイト (Kate) と所帯を構えることを夢見て、叔父の前で自らの願望を口にする。

‘To be sure, I see it all’, said poor Nicholas, delighted with a thousand visionary ideas, that his good spirits and his inexperience were conjuring up before him. ‘Or suppose some young nobleman who is being educated at the Hall, were to take a fancy to me, and get his father to appoint me his travelling tutor when he left, and when we come back from the continent, procured me some handsome appointment. Eh! uncle?’

‘Ah, to be sure!’ sneered Ralph.

(*Nicholas Nickleby*, 27)

同様の夢は『ドンビー親子』でも語られる。ウォルター・ゲイ (Walter Gay) の西インド諸島行きが決まったのを知ったカトル船長 (Captain Cuttle) は、ゲイの将来を相談しに支配人のカーカー (James Carker) に会いに行く。カーカーはゲイの将来は明るいと言っていると、ウィティントンの夢に現を抜かす船長はゲイとフローレンスの結婚を口にしかける。

“Gay has brilliant prospects,” observed Mr. Carker, stretching his mouth wider yet; “all the world before him.”

“All the world and his wife too, as the saying is,” returned the delighted Captain.

At the word “wife” (which he had uttered without design), the Captain stopped, cooked his eye again, and putting the glazed hat on the top of the knobby stick, gave it a twirl, and looked sideways at his always-smiling friend.

(*Dombey and Son*, 249)

ディケンズの主人公が紡ぐ夢は概ね、こうした経済的な成功と安定を叶えようとする物語のパターンが一般的である。そこでは何を得心かと同時に、どう得心かも大切である。こうした夢物語のパターンを精神分析のフロイト (Sigmund Freud) は次のように要約して見せる。1908年発表の“*Der*

Dichter und das Phantasieren”である。

Nehmen Sie den Fall eines armen und verwaisten Junglings an, welchem Sie die Adresse eines Arbeitgebers genannt haben, bei dem er vielleicht eine Anstellung finden kann. Auf dem Wege dahin mag er sich in einem Tagtraum ergehen, wie er angemessen aus seiner Situation entspringt. Der Inhalt dieser Phantasie wird etwa sein, dass er dort angenommen wird, seinem neuen Chef gefällt, sich ihm Geschäfte unentbehrlich macht, in die Familie des Herrn gezogen wird, das reizende Töchterchen des Hauses heiratet und dann selbst als Mitbesitzer wie später als Nachfolger das Geschäft leitet. Und dabei hat sich der Traumer ersetzt, was er in der glücklichen Kindheit besessen: das schützende Haus, die liebenden Eltern und die ersten Objekte seiner zärtlichen Neigung. Sie sehen an solchem Beispiele, wie der Wunsch einen Anlass der Gegenwart benutzt, um sich nach dem Muster der Vergangenheit ein Zukunftsbild zu entwerfen. (Freud, 175)

孤児の少年、雇い主とその娘、勤勉な労働とその見返りとしての仕事上の成功と出世、結婚と家業の相続、事業の拡張と世俗的栄誉…こうした野心を実現しようとする成り上がり者 (upstart) の人生がそこに集約されている。フロイト自身がディケンズやケラー (Gottfried Keller)、フォンターネ (Theodor Fontane) などを好んだので、彼の集約した物語がディケンズの前テクスト (Ur-text) に極めて近いのは当然かもしれない。フロイトがこの論文で集約した事項、孤児の少年、雇い主とその娘の存在、娘との結婚と白日夢の完成という設定は、そのまま『ウィティントンと猫』を抜き書きしたものと言える。更に言えば、ホーガースとも重なるがこれは後で述べることになるだろう。

いずれにせよ、ディケンズと『ウィティントンと猫』の伝承は相続と継承というテーマで繋がっている。財産の獲得と継承を要とした成功物語であるこの伝承には、超自然的な事件・筋書きの介入もなく、合理主義的で、何よりも日常性を重んじるイギリス人の経験主義の精神には格好の素材だと思われる。バックリー (Jerome Buckley) は、ヴィクトリア朝時代はエリザベス朝のように活力あふれ、人々が慣習と道徳に捕われた時代であり巷にあふれたコンダクト・ブック、修身書、マナー・ブックが人々に振る舞い、身だしなみを教えたという：“In its many-sided concern with manners

and morals, the Victorian era was not unlike the Elizabethan age, when conduct-books, pamphlets, plays, sermons, poems explored the problem of degree in an expanding economy” (Buckley, 10)。つまり、嗜みとして世俗の振る舞いとモラルが重視されていたのである。その意味では、世俗性が強く、超自然的な要因が乏しい『ウィティントンと猫』の伝承は、コンダクト・ブック、修身書的なメルヘンである。カチンが、事あるたびにドイツ・ロマン派のティーク (Ludwig Tieck)、ホフマン (E. Th. A. Hoffmann)、ブレンターノ (Clemens Brentano) らの音楽性と色彩に富んだ幻想的メルヘンと並置し、ディケンズとの親和性を見るのは (Kotzin, 82)、正鵠を得た指摘とは言えないだろう。

次章では『ウィティントンと猫』の伝承をジョゼフ・ジェイコブズ (Joseph Jacobs, 1854–1916) が収録し、編集した『イギリス御伽噺とその続編』 (*English Fairy Tales & More English Fairy Tales*, 1890) に収められたテキストを基に、伝承の在り方を分析してみる予定である¹⁾。

3. 『ディック・ウィティントンと猫』：虚構と現実

『ウィティントンと猫』の伝承は『大英百科事典』の第11版 (*Encyclopedia of Britannica*, 11th ed.) によれば (615)、『書簡暦』 (*Calendar of Letter-Book*) という15世紀の書物を皮切りに、多くの替え歌やチャップ・ブックでも、その話が取り上げられたという。こうした変奏に富むウィティントンの話をまとめ、人口に膾炙するよう手ごろな形に再話したのがジェイコブズである。彼は晩年のディケンズと生年が少しかぶっており、まぎれもなくヴィクトリア朝の人間である。以下、ジェイコブズが編集した御伽噺集に基づき、話をたどってみよう。

物語のウィティントンはエドワード三世の時代 (1327～77) に孤児としてロンドンではなく、イングランドのある村に生まれる。両親は既に亡くなっており、村人たちにパン、ジャガイモなど食料をめぐんでもらい、何とか露命を繋ぐという有様である。ある日、ロンドンへ向かえば一旗揚げることができ、何とか稼げると聞き、ロンドンへ向かう。その様子は、ジェイコブズでは次のように描かれている：“He thought that this wagon must be going to the fine town of London; so he took courage, and asked the waggoner to let him walk with him by the side of the waggon. As soon as the waggoner heard

that poor Dick had no father or mother, and saw by his ragged clothes that he could not be worse off than he was, he told him he might go if he would, so off they set together” (Jacobs, 168)。ロンドンのすべての通りが、“the streets were all paved with gold”と金で敷き詰められていると表現されている個所では、バーナービー・ラッジ (Barnaby Rudge) の台詞を思わせる (ch.47)。また、メイヒュー (Augustus Mayhew) が『金に敷き詰められて』 (*Paved with Gold: Or the Romance and Reality of the London Streets*, 1857) という小説を書いているように、この表現は成り上がり成功譚には不可欠である。ともあれ、ロンドンに到着した頃のウィティントン、殆ど餓死寸前のところ裕福な商人のフィツウォレン (Fitzwarren) に助けられる。裕福な商人に雇われ、何とか一命をとりとめる。ただ、台所番として雇われたものの、意地の悪い料理番に虐待される屈辱的な日々を送ることになる。

ある日、フィツウォレンは「船を仕立てて外国へ出す」ことになり、召使い一同に、何か運試するものを持っていないかと聞く。ディックは、屋根裏のネズミを退治するために譲ってもらった猫をやむを得ず差し出す。この猫は船がアフリカの海岸に漂着したとき、ネズミの被害に悩まされている当地の王様に重宝されることになる。そして、「船の積み荷全部を買い、その上積み荷全部の十倍の金で猫を買って」もらうことになる。やがて船は、思わぬ富をウィティントンに齎すことになって戻ってくる。一方のウィティントンは、そんな知らせはつゆ知らず、意地悪な料理番の虐待に耐えかねて脱走してしまう。ロンドンの郊外で休み、あと先の事を考えていると鐘の音が聞こえてくる。

While he was thinking what he should do, the Bells of Bow Church, which at that time were only six, began to ring, and at their sound seemed to say to him:

‘Turn again, Whittington,
Thrice Lord Mayor of London.’

‘Lord Mayor of London!’ said he to himself. ‘Why, to be sure, I would put up with almost anything now, to be Lord Mayor of London, and ride in a fine coach, when I grow to be a man! Well, I will go back, and think nothing of the cuffing and scolding of the old cook, if I am to be Lord Mayor of London at last.’

(Jacobs, 171-2)

ロンドン市長に三度もなるお方と、鐘が伝えてきたのだ。不思議に思いながら、フィツウォレンの店へと引き返す。時を同じくして、船がアフリカから戻り、ウィティントンが預けた猫のおかげで、船荷が全て売れ、挙句、その数倍もの稼ぎを持って戻ってくる。ウィティントンは主人からすぐに呼ばれる。知らせを聞いたウィティントンは大金をどうしてよいかかわからず、主人に託そうとするが、フィツウォレンは受け取らない。また世話になった主人の妻、娘のアリスに一部を預けようとするが、彼らもウィティントンの成功は祝福するものの、お金は受け取らなかった。ウィティントンは「それを全部ひとり占めになどできないほどの好人物だったので」、主人を含め店の人たちに気前よく「贈り物」をした。主人は仕立て屋を呼び、ウィティントンに紳士らしい格好をさせた。やがて、二人が愛しあっていることに気付いたフィツウォレンは、二人の結婚式を執り行う。物語はこう締めくくられている。

History tells us that Mr. Whittington and his lady lived in great splendour, and were very happy. They had several children. He was Sheriff of London, thrice Lord Mayor, and received the honour of knighthood by Henry V. (Jacobs, 176)

ところで『大英百科事典』の11版によれば、実在のリチャード・ウィティントンは14世紀の半ば頃、ウィリアムとジョアンの子として生まれてという。父親のウィリアムはグロスターの名家出身の騎士(knight)である。1379年ごろから貿易業に手を染め、商人として頭角を現す。やがて、フィツウォリン(Sir Ivo Fitzwaryn)というドーセットの騎士の娘アリスと結婚する。事業の拡大に成功し、公職(Alderman)を歴任する。そして、1397年にロンドン市長に就任する。後に2回(1406～07、1419～20)就任する。在任中は大商人としてヘンリー4、5世に多額の貸し付けを行った。また、1421年にはヘンリー5世を祝宴に招いて盛大な祝宴を招いたことでも知られる。他には図書館の創設、ニュー・ゲイト監獄の改修、そして死後はその遺産はグイロ・ホール、ベツレム病院の補修など多くの慈善事業に使われたという。こうしたウィティントンが初めて物語に登場するのは1606年の、彼を主人公にしたトーマス・ヘイウッド(Thomas Heywood)の劇であるという。決定的な人物像が描かれたのが1611年のボーモント&フレッチャー(Beaumont & Fletcher)合作の『燃えるすりこ

木の騎士』(*The Knight of the burning Pestle*) だという (*Encyclopedia*, 615)。

こう概観してみると、実在したウィティントンと御伽噺上のそれとでは、大きな隔たりがあることが分かる。まず出生の変更である。歴史上のウィティントンが夫婦ともども騎士という、下層の貴族階級の出身であり経済的にも恵まれた両親に育てられたのに対して、一方の伝承上のウィティントンは若くして両親を亡くした孤児で、かなり低い身分の出身である。次に目に付くことは、物語のウィティントンに幸運と富をもたらす猫が、現実には不在であることである。これは一見、あまり関係がないように思われるが、猫の存在があるため、『ウィティントンと猫』の物語は本人の勤勉と努力というよりは他力本願による成功、幸運の成就という印象を強めたと思われる。そのため、その削除を主張されたくらいである。それに反して、歴史上のそれは一応、自力で努力し、地位を得た人物のように思われるが、余り詳細には記されていない。

同じことはフィツウォレンという慈悲深い、“benevolent”な雇い主の存在にも言える。例えば1840年代のチャーティズム運動が吹き荒れた時代を考えれば、慈悲深い主人は労働者階級の“protector & benefactor”という庇護者的な存在に近く、ディケンズのテキストでも『オリヴァー・ツイスト』のブラウンロウ(Mr. Brownlow)や『ニコラス』のハンブルグ商人チェリブル兄弟(The Cherrybles)などがすぐ思い浮かぶ。現実のウィティントンは『大英百科事典』の記述によれば“clearly entered on his commercial career under favourable circumstances”(615)と、「恵まれた環境で」事業を始めたと記されているだけで、支援者の名前は一切ない。従って、伝承上のウィティントンにとり一見、些末と思われる猫と篤志家的な雇い主の存在は、ウィティントンが貧困、困難を克服し、幸運をつかむためののし上がっていく幸福な主人公となるためには欠かせない存在に思われる。こうして、ウィティントン物語は、幸福な立志伝中の人物(self-made man)としての新たな相貌を獲得していく。ところで、『大英百科事典』によれば、実在したウィティントンは“Much of Whittington’s fame was probably due to the magnificence of his charities”(615)と生前の派手な慈善事業により名をとどめているという。そうだとすれば、金銭上の気前の良さは、物語ではフィツウォレンの“benevolent”な側面に受け継がれていったと考えるべきで、伝説に新たな変奏を加える要因になったというべきだろう。

以上、伝説と史実の相違について触れた。出生、階級の違い、慈悲深い

雇い主の不在など。こうした差異は、伝説上のウィティントンに“rags to riches”という成り上がりの一代記たらしめる要因になったと言えるが、それ故に伝承には新たなイメージが付与されることになる。ここで、既に引用したバックリーの指摘を思い出せばよい。つまり、ヴィクトリア朝時代は、エリザベス時代同様にコンダクト・ブック、ガイド・ブック、修身書が巷にあふれた時代であり、人々の関心はモラル、道徳など如何に振舞うかということであった。こうした文脈に『ウィティントンと猫』という伝承を置いて見れば、人々、とりわけ労働者階級にとって、どのようにしてのし上り、今の境遇を脱しようかということは、最大の関心事であったと思われる。となると、労働者階級が自らをウィティントンに重ね合わせて、それをコンダクト・ブック的な読み方をして、(幸運によるにせよ)脱階級の夢を育んだことは想像に難くないだろう。そうした欲望がウィティントンという少年を「徒弟」(apprentice)という新たなイメージと一体化させたように思われる。そこで思い出されるのが、ホーガース(William Hogarth)の『勤勉と怠惰』(*Industry and Idleness*, 1749)という連作銅版画だが、それに触れないわけにはいかないだろう²⁾。

4. 徒弟登場：ホーガースの『勤勉と怠惰』へ

『勤勉と怠惰』はホーガースの4大傑作銅版画の掉尾を飾る大作である。徒弟というイギリス小説に頻繁に登場する人物を明確に印象付けるのに大いに影響力があった。この版画は全作12の場面からなっており、毎月一回、教会での説教に用いられ、一年で完結するために12回の連作に仕上げられたと思われる。フランシス・グッドチャイルド(Francis Goodchild)とトム・アイドル(Tom Idle)という二人の徒弟の対照的な人生を扱っている。ちなみに、名前そのものが寓意的であり、とりわけ前者は日本名にすると「良児」という名前がふさわしいだろう。第一図の「織物工場にて」(At their Looms)では、二人の徒弟が機の前に立っているが、前者は全く仕事に身が入らぬ様子であり、背後の壁には「徒弟の心得」という張り紙がある(図②)。信心深いグッドチャイルドは、会計係にまで出世し(四図)、見込まれ親方の娘と結婚する(六図)。そして、執政官にまで出世し、祝宴が開かれる(八図)。やがてロンドン市長に就任し、町中を行進する(十二図)。一方のトム・アイドルは盗み、殺人の罪を重ね、なんと九図では

かつての同僚に助命嘆願する有様で、最期はタイバーンで処刑されるという対照的な末路が描かれる(十一図)。つまり、良き徒弟と悪しき徒弟という、両義的なイメージを徒弟という存在に与えたのである。このことは『ディック・ウィティントンと猫』の物語に潜む、両義性をも示唆している。

経済学者の大塚久雄は『社会科学における人間』のなかで、ウィティントン神話に潜む非合理性を次のように指摘している。「…あの架空の物語のなかには当時の遠隔地商業の、とりわけ外国貿易の非合理的・投機的性が見事に描き出されている。いや、およそ近代以前の「資本主義」的営みにひそむ非合理的・投機的な本性が、きわめて単純化された姿でみごとに示されている…」(54)。さらに、この非合理性は「ロビンソンの人間類型によって圧倒される」まで、失われないと指摘する(55)。物語の投機性はロビンソン・クルーソーの「経営」、(ロビンソンが島で一日の貸借対照表を作っていたことを思い出そう)により何とか克服される。ホーガースに置き換えれば、ウィティントンの非合理性は確かに勤勉な、又は理想的な徒弟により目立たなくなり、模範的な徒弟により成功が保証された出世物語が成立する。不安定さはとりあえず影を潜め(『大いなる遺産』、*Great Expectations* まで)、模範的な徒弟的主人公が前面に出てくる。オリヴァー、ニコラスなどである。これらのテキストでは、ブラウンロウ、チェリブル兄弟の存在により主人公はそれぞれ、幸福な継承者になりえることができた。問題は中期以降のディケンズに、こうしたウィティントン的な構図がどこまで当てはまるかであり、結論から言えば勤勉な徒弟的な主人公といえども、成功が担保されているとは言えない。『大いなる遺産』では墮落した徒弟的な存在としてジョージ・バーンウェル(*George Barnwell*)という恩人のおじ殺しの殺人犯が言及されるからだ³⁾。だが、この徒弟は主人公ピップ(*Pip*)の罪の意識の文脈でなされるもので、スマイルズ風の自助精神の文脈とは異なる。従って、徒弟的人物の抱える矛盾がディケンズに齎す影響に関しては『ドンビー親子』の分析を待たなければならない。その前に、徒弟の存在に潜む両義性についてもう少し考察する必要があるだろう。

5. 徒弟の矛盾

ホーガースやウィティントンを思わせる徒弟の物語には、様々な矛盾を

秘めている。代表的な例が大塚久雄の指摘した物語が示す投機性である。つまり、成功するかどうかは、本人の資質、能力、働き方とは別に、運と言う不確定なものに大きく左右されるからである。ディケンズの初期小品で『ベントレー・ミセラニー』(*Bentley Miscellany*)に1837年に発表された“Public life of Mr Tulrumble, Once Mayor of Mudfog”でもウィティントンへの言及が見られる。タルランブル氏は“like his great predecessor Whittington” (5) のように事業の成功を収めるが、成功後は“growing vain and haughty” (5) になったと記され、必ずしもウィティントンの成功は手放しで褒められていない。『荒涼館』(*Bleak House*)ではエステル (Esther) が、いとこリチャード・カーストン (Richard Carstone) が定職にもつかず、無為に過ごしているさまをジャーディス (Jarndyce) とともに心配している個所がある (ch.9)。他人の好意を期待するのは、『大いなる遺産』ではハヴィシャム (Miss Havisham) の周囲に集まった人々も同じである。また『ボズのスケッチ集』では、投機に金をつぎ込み、浮き沈みの激しい人生を送っている“schoolmaster”の事が冒頭に出てくる。ともあれ、成り行き任せの運に任せて、ろくに働きもせず一攫千金という不確かな夢を追っている人物は確実にディケンズの風刺の対象になっている。『デイヴィッド・銅パイプフィールド』(*David Copperfield*) のミコーバー (Micawber) は、唯一、幸福な例外である。ところが、少し前のイーガンになると事情は少し変わってくる。イーガン (Pierce Egan) も『ロンドンの生活』(*Life in London*)の中で、ロンドンには“Architects of their own Fortunes”と呼ばれる人が多くいると述べ、彼らが超人的な精力と努力で財を築いたことに驚きを隠さない。

They have toiled incessantly throughout the whole of their lives; they have borne the severest privations without a murmur; and by their industry and perseverance have surmounted almost giant-like difficulties, and ultimately accomplished the grand object in view — A LARGE FORTUNE. (Egan, 67-8)

イーガンの引用はここでの文脈とは異なるが、財を築くことの現実の厳しさ、そのために想像を絶する努力が要請されることを教えてくれる。厳しい現実があるからこそ、幸運を当てにする機運も生じるのだ。

同時代をさかのぼる18世紀になっても事情は変わらない。ホーガース

が1721年に発表した南海泡沫事件を風刺したエッチングや「富くじ」と題するプリントには、他力本願的な人生が批判されている。とりわけ前者では欲望を象徴する山羊のメリー・ゴーランドに貴族、牧師、書記、老婆、娼婦など、ありとあらゆる階層の人間が投機熱に浮かされて、堂々巡りの人生を送っていると揶揄される(図③)。左に女性が殺到する建物の上には不貞を象徴する鹿の角に、「夫選びの富くじ」と書かれている。こうした例を挙げるまでもなく、勤勉と正直の見返りに成功を保証したはずのウィティントン物語がもてはやされた一方で、怠惰、墮落、不道德など、不確定な投機をあてにする人生は批判されていたのである。

ウィティントン物語の不確定性は、さらにその前近代性にある。そのために出てくる徒弟は抽象的ないしは理想的、もしくはいささか時代遅れのイメージで語られる。例えば『ピクウィック・ペイパーズ』(*Pickwick Papers*)のサム・ウェラー(Sam Weller)、『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*)のキット・ナッブル(Kit Nubble)である。これに『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*)のマーク・タプレー(Mark Tapley)、トマス・ピンチ(Thomas Pinch)らが加わり、ディケンズのテキストでは主に前期に集中する。彼らに共通するのは主人に従者として忠実に仕えていることである。つまり、ディケンズがこれらの人物で訴えようとしていることは、主人と従者の理想的な主従関係である。理想的な主人と従者の絆が謳歌され、具体的にどのような匠を得ようかと訓練しているのか不明確である。従って、ディック・ウィティントンやフランシス・グッドチャイルドのような勤勉な労働と見返りとしての出世という「たたき上げ」的な徒弟とは、少し文脈が異なる。そもそも具体的に何をしているのか、ディケンズが描く徒弟は曖昧な印象はぬぐえない。次にあげるのは『ボズのスケッチ集』の「人物像」に描かれた“London apprentice”である。ここでは多少、滑稽で時代遅れの徒弟が描かれている。

But next to our very particular friends, hackney-coachmen, cabmen, and cads, whom we admire in proportion to the extent of their cool impudence and perfect self-possession, there is no class of people who amuse us more than London apprentices. They are no longer an organized body, bound down by solemn compact to terrify his majesty's subjects whenever it pleases them to take offence in their heads and staves in their hands. They are only bound now by indentures;

and as to their valour, it is easily restrained by the wholesome dread of the New Police, and a perspective view of a damp station-house, terminating in a police-office and a reprimand. They are still, however, a peculiar class, and not the less pleasant for being inoffensive. Can any one fail to have noticed them in the streets on Sunday? (Sketches by Boz, 254)

これ以外にディケンズが描く徒弟は、『バーナービー・ラッジ』(Barnaby Rudge) のティム・タパーティット (Tim Tappertit)、『大いなる遺産』のピップ (Pip) があるが、前者も殆ど喜劇的な存在である。そして、彼らとて主に描かれているのは仕事の中身というよりヴァーデン (Gabriel Varden)、ジョー (Joe Gager) のそれぞれの主人との関係である。つまり、ディケンズの描く徒弟はセルフ・メイドマンの文脈から離れ人間味あふれた、緊密な主従関係が中心となるため、どうしても現実離れた印象を免れないのである。主従の関係がこのように濃密なのは、ディケンズがあるべき徒弟像を想定し、それを理想化したためである。それは徒弟 (物語) にまつわる不安定さと表裏一体の関係にあるのだ。

徒弟の矛盾がはっきりしてくるのは、“inheritance”、つまり「相続・継承」を問題にするときである。サドリンはディケンズ批評の多くは、いくら“financial matter” (6-9) に関心をおいても、“bequeathing”、つまり贈与を指す継承には関心を払ってこなかったと指摘する (Sadrin, 6)。『オリヴァー』の例を挙げてみよう。オリヴァーはブラウンロウの養子となり、財産と身分が保証されるところで物語は終わる。オリヴァーは子供のままで、ここで成長を止めてしまうために、読者はその後を心配する必要はなく、財産の継承は永続的に保証されたものと考えてしまう。つまり、オリヴァーは財産 (富) と同時に、紳士という身分も自動的に保証され、彼が将来どうやって生活していくのかは関心の埒外にある⁴⁾。ディック・ウィティントン、フランシス・グッドチャイルドも同じである。彼らは財産と同時に、職業、社会的身分も継ぐ。「継承・相続」とは、富 (財産) のみならず、生活手段としての職業をも継ぐことだった。『オリヴァー』では、それは不問にされた。『ニコラス』もチェリブル兄弟の支援により、富 (財産) と職業 (商会の仕事) を引き継ぐことが可能になった。つまり、ディケンズの初期テキストでは、「継承」とは、単に財産を継ぐのみならず、富をも可能にした社会的身分、職業をも同時に「継ぐ」(又は「得る」) ことを

意味したのである。その意味ではサドリンは「継承」の意義を指摘しているが、理解は一元的である。しかし、ウィティントン伝承をなぞってきたディケンズも、次第に「継承・相続」の意味を問ひ直さざる得なくなってきたと思われる。それが、表れているのが中期のディケンズであり、ここでは『ドンビー親子』を中心に検討して、最後に新たな「継承・相続」の再検討がディケンズにどのような問題をもたらしたのかを概観して、結論とする。

6. 『ドンビー親子』：ウィティントンの呪縛

『ドンビー親子』ではウィティントン伝承が、一貫して組織的に扱われている。ジョン・フォスター (John Forster) がディケンズのローザンヌからの手紙で伝えているとおり、ディケンズはウォルター・ゲイに関しては “gradually and naturally trailing away, from that love of adventure and boyish light-heartedness, into negligence, idleness, dissipation, dishonesty, and ruin.” (Forster, 21) とゲイ少年を墮落させることで、ウィティントン伝承の虚構性をつく予定であった。実際、ゲイの運命は没落したカーカーの兄によりある程度、予兆されている。ゲイはカーカー兄に関心を示す: “I have felt an interest in Mr. Carker ever since I have been here, . . .” (189)。ディケンズはウィティントン伝承を導入したときは、ゲイの将来は “still undecided” (Tillotson, 101) だったと指摘される通りだと思われるが、その後の展開でゲイとジェームズ・カーカーが二重写しになり、御伽噺的な要因をディケンズが弱めようとしていたことがはっきりする。確かにこのテキストでは、ブランロウ、チェリブル兄弟などの慈愛溢れる支援者は存在しない。つまり、“benevolent” な “a fairy god father” のような個人が介在する余地はない。また、それがあれば社会の悪、個人の貧困、困窮も是正できるという単純な構図ではなく、ウィティントン伝承も新たな局面を迎えたといえる。本来なら頁数を割いて論じるところだが、ここではゲイとフローレンスの関りに絞り、論を進めていく。

6章でゲイは偶然、フローレンスを救出する。乳母のスーザン・ニッパー (Susan Nipper) の家へ、ポール (Paul) を連れて訪ねて帰るとき、フローレンスははぐれてしまう。グッドブラウン夫人に拉致されて、彼女の家へ連れていかれてしまう。波止場近くまで連れていかれて、そこで解放され

たところをゲイに助けられる。靴を拾い、彼女に履かせるところは次のように描かれている。

Walter picked up the shoe, and put it on the little foot as the Prince in the story might have fitted Cinderella's slipper on. He hung the rabbit-skin over his left arm; gave the right to Florence; and felt, not to say like Richard Whittington — that is a tame comparison — but like Saint George of England, with the dragon lying dead before him. (82)

この出会いは中心的な役割を果たす。ゲイはバルバドス島行きが決まった後でも、フローレンスに関しては“... he could do no better than preserve her image in his mind as something precious, unattainable, unchangeable, and indefinite...” (231) と甘い感傷を抱き続けている。ゲイの夢見がちな性格は“He pampered and cherished it in his memory, especially that part of it with which he had been associated; until it became quite the spoiled child of his fancy, and took its own way, and did what it liked with it” (118) と別の個所でも取り上げられている。しかし、ゲイ以上に夢見がちなのがカトル船長と叔父のソロモン・ギル (Solomon Gill) で、この二人によりウィティントン伝承のイメージがテキストに拡散されることになる。

“‘Turn again Whittington, Lord Mayor of London, and when you are old you will never depart from it,’” interposed the Captain. “Wal’r ! Overhaul the book, my lad.” (47)

実際のところゲイとフローレンスが将来的に結ばれるという、勝手な夢を抱いているのがカトル船長で、ゲイに向かって“You go and get ready. Lord bless me! Sir Richard Whittington thrice Lord Mayor of London” (85) と持て囃し、“building a great many airy castles of the most fantastic architecture” (86) と空中楼阁ばかり思い描いているからである。後にドンビー商会へ、フローレンスの無事を知らせ、彼女を連れて行くところで (87-90)、ゲイは自らの立場とドンビー家の階級的な彼我の格差を見せつけられて悄然となる。ところが、カトル船長は相変わらず、空中楼阁に勤しんで現実に気付いていない。やがて、ゲイは危険視されたカーカー弟 (James Carker) により、

バルバドス島への配属を通達されるが、その知らせすら出世への階梯と考えて能天気を受け取ったのはカトルである。叔父が絶望する中、ゲイは赴任地への航海に出かける。

ゲイが出航してしばらくたつと、Son & Heir 号の難破が知らされ、叔父のソロモン・ギルも甥を探しに旅に出る。この難破の知らせは、ゲイをテキストの表舞台から抹殺するという方策であることは、難破により商会にもたらされた人的、経済的損失についてテキストが一切、沈黙していることから明白である。その間、物語はドンビー夫妻の確執と、それを伺うカーカーへと焦点が移る。ゲイの遍歴・冒険は全く脇へと追いやられてしまう。話が展開するのは48章で勘当されたフローレンスがカトル船長が店番するギルの商店に身を寄せてからである。20年ぶりにゲイが帰還し(49章)、二人の婚約が手短に語られる(752)。ゲイとフローレンスの家庭が築かれるのとは対照的に、ドンビー家の崩壊と商会の没落が手早く進行する。カーカーとエディスの駆け落ち、商会の倒産(857)が立て続けに起こり、ドンビーは一切の公職から身を引く。

しかし、この結末はどちらかと言えば因果応報的な勧善懲悪の印象がある。しかも、ドンビー商会の没落とウォルターの事業と手腕の評判が日ましによくなるという事実を耳にすると、この結末には御伽噺的な非現実感をぬぐうことはできない。トゥーツはギルに向かって、かつての友人の順調な仕事ぶりについて、こう伝えている。

“‘Here he is,’ says my wife, ‘released from that, immediately; appointed by the same establishment to a post of great trust and confidence at home; showing himself again worthy; mounting up the ladder with the greatest expedition; beloved by everybody; assisted by his uncle at the very best possible time of his fortunes’ — which I think is the case, Mr. Sols? My wife is always correct.” (923)

更に不思議なことは続く。“I am behind the time altogether, my dear Ned,” (131) と、あれだけ自分の商売が時代遅れだとの嘆きを発していたソロモン・ギルの店が、商会の没落以降、俄か景気に沸くのだ：“. . . ; and that instead of being behind the time in those respects, as he (Mr. Gills) supposed, he was, in truth, a little before it, and had to wait the fullness of the time and the design” (921)。そして、“Turn again Whittington Lord Mayor of London, and

when you are old you will never depart from it?’ と (924) 再び、ウィティントンの名前を口にしてテキストは閉じる。ディケンズはゲイの墮落を描くことで、当初はウィティントン伝承の虚構と批判を展開するつもりだったと思われるが、この結末は一体何を意味するのだろうか。それについて、ヴァイス (Weiss) はこう述べている。

Walter remains the honest Dick Whittington figure, the hero of self-help, and is rewarded with financial success and the hand of his employer's daughter in marriage. He will establish a financial empire to rival that of Dombey, but in some murky fashion, never made explicit but clearly allied to the angelic nature of his wife, his empire will be run upon principle of Christian love and charity rather than greed and the profit motive. (71)

ヴァイスが指摘するように、ゲイはディック・ウィティントンの人物として全うする。その意味では、ドンビーの世界を引き継いだゲイの「選択」は、筋が通っているようには思えない。ディケンズの当初の目的はゲイの墮落を描くことで、ウィティントン伝承の虚構を暴くことだった。そして、その腹案はフィツウォレン的な人物を省くことで、ゲイの自律性が試され、その墮落に拍車がかかるはずであった。確かにフィツウォレン的な人物はカーカーやドンビーに取って代り、ウィティントン伝承の批判へのお膳立ては整ったように思われる。しかし、きわめて非現実的な（御伽噺的な）方法により、ゲイの成功が保証されたため、ウィティントン批判は弱められこそすれ、強められることはなかったと思われる。なぜなら、ゲイの成功は非現実な御伽噺の世界でこそ可能なものであり、ブラウン (Brown) が指摘するように、ゲイの示唆する中産階級的な徳である “self-dependence, thrift, industry, earnestness” が、どちらかと言えば資本主義の初期的な要因、それこそウィティントンの要素として目立つからである (41)。繰り返そう。ジャック・ザイプス (Jack Zipes) が用いた、「希望をもって世界を転覆」するのが御伽噺の社会的な機能なら (ザイプス、161–220)、つまりここでは資本主義社会の腐敗を告発しようとするなら、ディケンズは明らかにヴィクトリア朝社会を「転覆する」(subvert) のに失敗した。むしろ、個人の持つ良き意図と想像力、共感能力だけでは、ヴィクトリア朝の商業主義の弊害を克服するのは無理であるという、厳然たる事実を模糊したよう

に思われる。転覆には失敗した…では、どのような希望をもって描こうとしたのだろうか。未来図(希望)はしかし、不透明だったのではあるまいか。とはいえ、読者のもとにはささやかな希望(経済的な成功を収めるといふ)が、ゲイの事業の継続とかすかな成功という形で残されたのである。

それにしてもどうしてこうなったのであろうか? ここで、財産の「相続・継承」の意味を再考してみよう。例えばオリヴァーは、ブラウンロウの財産と地位を自動的に継ぐことができた。オリヴァーは紳士のままで済んだから、読者はオリヴァーが成長して働くことを想定しなくてもよいからである⁵⁾。しかし、『ドンビー親子』以降では、「継承・相続」は財産と、それを可能にする職業を描かざるを得なかったのではないだろうか。これからディケンズは *profession*、専門職の問題に直面する。『荒涼館』のカーstonが悩んだように。そして、ドイス、アーサー・クレナム(『リトル・ドリット』)が試行したように。しかし、『ドンビー親子』では、ディケンズが依拠したのは御伽噺的な方法である。そのため、ゲイの物語は前近代的な、ロマンス風の「～の生涯と冒険」という形をとらざるを得なかったのである。しかも、前作の『マーティン・チャズルウィット』でマーティンのアメリカ行きを描いてしまったため、『ドンビー親子』では内実のない、形骸化したゲイの遍歴譚が反復されたのだ。

そう考えると、中期以降のディケンズはここで岐路に立たされたと思われる。一方ではディケンズはウィティントンの物語に呪縛されることになる。なぜなら、『大いなる遺産』、『我ら相互の友』のボッフィン(Boffin)ではウィティント的な夢を反映した「相続・継承」の夢が新たに反復されるからである。ミコーバーのように一攫千金を夢見て投機に熱中する輩も登場する。そして、もう一方では、ディケンズは専門職(*profession*)を得ようと、四苦八苦する人物を描く。徒弟は召使になり、『デイヴィッド・カッパーフィールド』のトラドル(Traddle)は法律家を目指す。そしてドイス、クレナムは起業を目指す。前者は主に中期のディケンズの関心事だったと思われる。しかし、専門職(*profession*)の夢があえなくなる時、ディケンズが戻ったのは、やはり『ウィティントンと猫』に描かれた慈愛に満ちた主人と徒弟の物語のように思われる。それは、『大いなる遺産』のピップとジョー、『我ら相互の友』のジョン・ハーモンとボッフィンの関係に象徴されるだろう。この論文は、ウィティントン伝承のディケンズ作品における役割と変容を素描し、合わせて作家としてのディケンズのキャリア

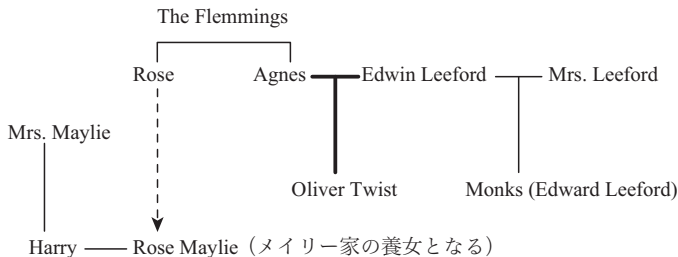
について触れ、大まかな見取り図を描くことを目的とした。今後、この方面、つまり中期作品では専門性、プロフェッショナルリズムの追求という観点で、そして後期、『大いなる遺産』以降に関してはウィティントン伝承の再現に関してそれぞれのテキストを考察するのが、筆者に課せられた課題である。

注

- 1) ジェイコブズの経歴は、木村俊夫、中島直子訳、『イギリス民話集 I トム・ティット・トット』（東洋文化社、1980）が比較的詳しい。訳もこれによった。従来、抄訳が多かったジェイコブズの久しぶりのまとまった完訳版だと思われる。
- 2) イギリス文学における徒弟の役割については、次の書に詳しい。原 英一、『徒弟たちのイギリス文学：小説はいかに誕生したか』（2012、岩波書店）エリザベス朝の演劇から、18世紀小説、市民劇までの、徒弟像を幅広く論考している。
- 3) 『大いなる遺産』では、バーンウェルはピップの罪の意識の象徴として言及される。但し、ピップの罪の意識は罪人とかかわったこと、姉の負傷、出身階級への劣等感など複合的な要因であり、悪しき徒弟、怠惰にかまけ悪徳の限りを尽くしたという、セルフ・ヘルプの文脈とは異なる。このジョージ・バーンウェルは、もともと1731年のジョージ・リロー（George Lillo）の『ロンドン商人』（*The London Merchant*）の登場人物で、公金発覚がばれて、叔父のサロウグッド（Thorowgood）を愛人ミルウッド（Millwood）に唆されて殺し、最後は愛人とともに処刑される五幕の悲劇の主人公である。同僚のトルーマン（Trueman）と対照的な役割。
- 4) オリヴァー、ニコラスに関しては、次の拙論を参照の事。『『オリヴァー・ツイスト』：オリヴァーとマンクス、又は二人の徒弟と異母兄弟の物語』（Mulberry 52, 2003）、『ディケンズとディック・ウィッティントン伝承：『ニコラス・ニッケルビー』における主人公についての考察』（Mulberry 56, 2007）。
- 5) オリヴァーの場合、成長して働くことを読者が想定する必要がなかったという事に関しては、少し説明を要するだろう。注4）で挙げた論文で筆者はかつて、『オリヴァー・ツイスト』のウル・テキストとして、フィールディングの『トム・ジョーンズ』を挙げ、それぞれの物語の背後の人間関係を系図で示し、類縁性を指摘した。ここで、再度、『オリヴァー・ツイスト』の人間関係を見てみよう。『オリヴァー・ツイスト』の系図と似ているのは、『リ

トル・ドリット』である。テキストのオリヴァーには意識はないが、仮にオリヴァーが焦点人物として機能し、彼の意識が読者に知らされれば、これはもうアーサー・クレナムである。実父リーフォード (Leeford) に当たるのがアーサーの父であり、リーフォード夫人に当たるのがアーサーの「母」、クレナム (Mrs. Clennam) と考えれば、『リトル・ドリット』はそのまま、『オリヴァー・ツイスト』の基本構造を踏襲しているわけである。しかも、冒頭のアーサー・クレナムは中国から戻り、新たに職に就こうと思案のさなかである。アーサー・クレナムは大きくなったオリヴァー・ツイストである。

『オリヴァー・ツイスト』の系譜図



参考文献

- Brown, James. M. *Dickens: Novelist in the Market-Place* London: The Macmillan Press, 1993
- Buckley, Jerome Hamilton. *The Victorian Temper: A Study in literary culture* Cambridge: Cambridge University Press, 1981
- Butt, John & Tillotson, Kathleen. *Dickens at Work* London: Methuen & Co. Ltd, 1957
- Dickens, Charles. *Sketches by Boz* Harmondsworth: Penguin Books, rpt. 1995
- Dickens, Charles. "Public Life of Mr. Tulrumble, Once Mayor of Mudfog" in *Master Humphry's Clock and Other Stories* London: J. M. Dent, rpt. 1997
- Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby* Oxford: Oxford University Press, rpt. 1990
- Dickens, Charles. *Dombey and Son* Oxford: Oxford University Press, rpt. 2001
- Dickens, Charles. *Hard Times* Oxford: Oxford University Press, rpt. 1998
- Dickens, Charles. "Where We Stopped Growing" in *Dickens' Journalism vol. 3: 'Gone astray' and other Papers from Household Words 1851-59* Columbus: Ohio State University Press, 1998
- Egan, Pierce. *Life in London* London: Methuen & Co, rpt. 1904

- The Encyclopedia of Britannica: A Dictionary of Arts, Sciences, Literature And General Information 11th Edition 23vol.* New York: The Encyclopedia Britannica Company, 1911
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens vol. 2* London: Dent, rpt. 1969
- Freud, Sigmund. *Bildende Kunst und Literatur* in Studienausgabe Band X Frankfurt am Main, 1969
- Jacobs, Joseph. *English Fairy Tales* London: Everyman's Library, 1993
- Kotzin, M.C. *Dickens and the Fairy Tales* Ohio: Bowling Green U.P., 1972
- Sadrin, Anny. *Parentage and inheritance in the novels of Charles Dickens* Cambridge: Cambridge U.P., 1994
- Stone, Harry. *Dickens and the Invisible World* An Arbor: University Microfilm International, 1979
- Weiss, Barbara. "The Dilemma of Happily Ever After: Marriage and the Victorian Novel." *Portrait of Marriage in Literature*. Ed. Anne. C. Hargrove and Maurine Magliocco. Macomb: Western Illinois University Press, 1984

邦語文献 (引用していないものもここに記した)

- 大塚 久雄『社会科学における人間』東京：岩波書店 1977
- 原 英一『徒弟たちのイギリス文学：小説はいかに誕生したか』東京：岩波書店 2012
- ジャック・ザイプス『おとぎ話の社会史：文明化の芸術から転覆の芸術へ』東京：新曜社 2001
- ジョセフ・ジェイコブズ『イギリス民話集 I トム・ティット・トット』京都：東洋文化社 1980

Sir Richard Whittington,
AND HIS CAT.

DICK WHITTINGTON was but a very little boy when his father and mother died, indeed so young that he knew neither of them, nor the place he was born in. After strolling about the country, as ragged as a colt, for a long time, he met with a waggoner, going to London, who gave him leave to walk all the way by the side of his waggon without paying a farthing for his passage, which very much pleased little Whittington, for he sadly wanted to see London; as he had heard the streets were paved with gold, his intention was to get a hat full: but how great was his disappointment to find the streets covered with dirt, and himself

3



without food, friends, money, or any person to give him a character.

In this situation, Dick asked charity of several people, and, at length, half dead for want of food, he laid himself down at the door of Mr. Fitzwarren, a merchant. Cicely, the cook, first saw him, and told him to go about his business. At this moment the merchant came home, and began to scold the boy for sitting at his door, and bid him go to

図 1



図 2



図 3

Dickens and Popular Myth: A Role and Significance of “Dick Whittington and his Cat”

Hiroshi ENOMOTO

Charles Dickens frequently displayed his deep erudition and affection for fairy tales; in his constant references to *Arabian Nights*, *Blue Beard* and Perreult's *Cat in Boots* and Grimm's Märchen. Also he expressed his primary concern with the rich treasure of popular myths in his periodical essays. Dickens' strong interests in rich storage of fairy tales and popular myths have inspired several academic scholars to look into Dickens' relation to the popular myth as inexhaustible resources of creative imagination.

These studies also demonstrate that Dickens uses the fairy-tale methods in his works to advocate the supremacy of imagination and fancy over rigid and sterility of Victorian utilitarian climate. Dickens makes constant defense of fairy tales as the rich source of imagination and fancy in human activities. However, the message academic scholars drawn from Dickens' works mainly emphasize Dickens' insistence on moral attitude to the stifling nature of the contemporary society. Unfortunately, inspiring as they are, their studies deny any clear analysis of how the author is stimulated by his concern with fairy tales and how he utilizes the rich material of fairy tales. Furthermore, the scholars have attached more weight to the tales originally coming from European countries, such as France and Germany, rather than the one indigenous to England.

This article reflects the operation of Dickens' mind to use fairy tales as an ideological strategy. His fairy tale methods deflect attraction from the hard realities of everyday lives and also continue to give a dream to working-class people. One of the most powerful ideological strategies turns out to be the story of Dick Whittington. The typical fairy tale of secular nature admits of none of any intrusion of supernatural agencies, but is mainly concerned with the suggestion of how the people climb up social ladder through industry and honesty. The focus of the discussion on the inheritance in the story will show how Dickens is affected and determined by ideological frame in the story of Dick Whittington. In short, Dickens' strenuous attempt to adjust the Whittington story and revise it to his contemporary society will reveal the

unresolved conflicts he faces throughout his creative activities: the rise of professionalism and professional society. My research on Dickens will be developed around the concern with the professionalism Dickens had to settle before him in his private lives as well as public lives.